

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.23

海中出現の仏様多数

篠原地区は、海岸沿いに位置していることもあって、海中から出現した仏様が多数、地域のお寺に祀られている。これは昔から海に対する畏敬の念を持ち続け、それを崇めることで心の安らぎを求めたものといえよう。また昔から津波など大自然の厳しい試練に遭遇してきた表れとも言える。

今後予想される「巨大地震・津波」に対する心構えに何か示唆するものがあると考え、地域の文献を参考に、海中から出現したとされる仏様について取り上げた。

聖観世音菩薩像 — 馬郡町 如意寺

馬郡観音として有名であったが、現在は「引佐山大悲院本尊観世音跡」の表示がされているだけである。この仏様は引佐細江の観音と称し、定朝が治安元年(一〇二二)諸国巡行の折、引佐細江の老杉の下で、一心不乱に大悲十句の経文を唱え祈り続けたところ、その老杉の頂に忽然として聖観世音菩薩が出現したことに感激、その老杉を伐って聖観世音菩薩を彫上げ、引佐の地にお堂を建て安置した。ところが久安五年(一一四九)に地震があり、山崩れや洪水が起きあたり一面大海になった。この時に菩薩の靈訓によりこの地に移し、粗末な祠を造り安置したとか、平安時代のことだ。
鎌倉時代に書かれた『東関紀行』によれば、筑紫の国の人が祈願成就して、鎌倉か

らの帰途に御堂を新しく立替えられたそうで、江戸時代には『東海道名所図絵』にも載せられる程、祈願が叶う観音様として有名であった。



西本徳寺にある石碑

釈迦牟尼仏像 — 馬郡町 西本徳寺

街道から見える門前に、「海中出現釈迦牟尼仏安置」の大きな石碑が立っている。

鎌倉時代仁治二年(一二四一)馬郡海岸で一尺二寸(約36cm)の金銅の仏像が漁師の網にかかった。漁師は「ありがたい観音様じゃ」と伏し拝み、お堂を建ててお祭りした。

やがて永徳元年(一一三八)九月に通りかかった日朝上人が法華経を読まれた際、これはお釈迦様だと悟り、村人達にお釈迦様のお告げを話し、長久山本徳寺が開山されたとある。その後明応七年(一一四九)の大地震で、村櫛の地に流されたが、お釈迦様のお

告げで馬郡の地に戻され安置されている。

延命地藏願王菩薩像 — 篠原町 長福寺

もともとは、現在の舞阪町の裏にあった長里郷が、明応の大地震、大津波で水没し、信者が大切にしていたお地藏様を背負い、命からがら現在の国方付近に漂着し、新しい里を作ったとされている。現在地藏堂に敷地藏として安置され、子育て地藏として知れている。

聖観世音菩薩像 — 篠原町 保泉寺

本堂に安置されている観音様は、今から四百年くらい前のこと。今の柏原辺りにあった東池である時、釣りをしていた人が、一体の仏像をひっかけ、取り上げたのが起源とされている。ある人が言うには「大津波の時に南海より流れ寄り、東池に沈んだのだろう」と。八月十日が例祭日で「十日観音様」と言われて崇敬され、昭和四十年代まで賑わっていた。

参考文献 わがまち文化誌『浜風と街道』

平成25年度主な活動

★ 山下孝先生講座

- ①「引札/広告の走り」
- ②「ミャンマーの遺跡」

★ 本年のテーマ

- ・地域の子供達にわかり易く

★ 主な自由研究

- ・分間延絵図に記載の篠原
- ・海にまつわる仏様
- ・天空への信仰について
- ・「水野南北」について
- ・篠原の誇れる所を探そう
- ・江戸時代の旅巡礼記
- ・田んぼの開拓を探る
- ・神社の鳥居について
- ・浜堤防の移り変わり 等

★ バス旅行/小旅行

- ・6月20日: 岡崎~豊川
- ・郷土の偉人記念館巡り

伊勢神宮参拝のこと

篠原小学校開校百年記念事業として発行された『波の音百年』（昭和四十九年十一月二十日発行）の中に篠原小学校の沿革を簡単にまとめた表がある。表の中に「昭和九年二月（一九三四）伊勢神宮参拝旅行第一回実施す。（尋常科六年生全員）」という行事が記載されている。

この行事は以後、続けて行われ、戦争が激しさを増す昭和十七年まで実施された。順調に六年生が参加することが出来ない年次もあり、高等科になってから実施した学年もあったが、この間の児童生徒は伊勢神宮への参拝に行ったのである。

最終実施年度の昭和十七年に六年生であった私（鈴木義雄）は一泊二日という初めての遠出になる参拝旅行に参加することができた。

旅行実施の理由

なぜ昭和九年から参拝旅行が行われたのだろうかと想像してみる。昭和八年に第四期の国定教科書改訂があり、国体尊厳を説く内容が取り入れられるようになって、その影響で参拝の実現に至ったのではないかと思われる。

しかし、当時の陸路交通機関は鉄道（蒸気機関車）が主で、所要時間は現在の二倍近くもかかる。関西方面から関東地域までの限られた範囲ではなかったかと考えられる。私の友人は東

京杉並区の小学校の出身であるが、伊勢神宮だけでなく、一泊三日で橿原神宮まで参拝したことを最近になって聞き非常にびっくりした。同じ府県でも地域により、実施の度合いは差があったと想像される。

参拝の記憶

参拝旅行の内容は、幼かったせいがかままり記憶は残っていない。二、三の記憶を辿ってみると

- ・ 列車は亀山を経由して伊勢へ向かった。車窓から見た秋の風景は茶色の多い景色で、篠原地区の海と白砂青松の明るい色彩を見慣れている目からみると異様な感じをもった。
- ・ 伊勢の旅館で就寝時、枕を投合ったり、ふざけあったりした。
- ・ 早朝に二見浦の海岸を散歩した。外宮へも参拝したはずであるが、社などの様子の記憶はない。
- ・ 手元にある六年一組の一枚の記念写真、宇治橋のたもとの静かな雰囲気の中で撮ったものであるが、参拝前後の記憶は定かでない。

以上のようなあっさりした記憶しかないが、何よりも貴重な思い出は、担任（鈴木勝司先生…後に戦死された）を中心に

した一枚の記念写真が残っているということである。

後年、伊勢神宮へは別宮を含めて何回か訪れ、認識を新たにしてきた。本年は式年遷宮という二十一年一度の貴重な年であるので、昔の旅を思い出して紹介した。



昭和 17 年参宮旅行

時代で場所を変えた 戦争記念碑

八阪神社の境内に戦争記念碑が四基建てられている。これらの石碑について、建立から現在までの経緯を追って見たい。碑は次の通りである。

- ・ 「征清記念之碑」 日清戦争に従軍した二十六人を記す
- ・ 「昭忠之碑」 日清戦争で戦死した六人を詳しく記す 明治二十九年建立
- ・ 「日露戦役記念」 四人の戦死者と百三十五人の従軍者を記す 明治四十三年建立
- ・ 「自大正三年至大正九年戦役記念碑」 第一次世界大戦従軍者六十一人を記す 昭和七年建立



八阪神社境内にある戦争記念碑

篠原小学校百年記念誌『波の音百年』の明治四十四年の記念写真の後方に、三基の石碑が見える。その形から、この年以前に建てられた戦争記念碑であることがわかる。この時の小学校は字三分一で、



明治44年卒業（高等科）

今では元学校と呼ばれている所である。

明治時代には戦死者の慰霊碑と従軍者の顕彰のための戦勝記念碑を、個別に建てる傾向があったので、「昭忠之碑」と「征清記念之碑」は同時に建てられたものと思われる。また、「日露戦役記念」碑はこの両方を兼ねたものとなっている。平和な村から多くの従軍者を出し、戦死者が出たことは村民に大きな衝撃となったものと思う。これらの碑は一村には立派過ぎる程大きく、「日露戦役記念」碑の題額は、時の元帥陸軍大将大山巖によるものである。国や軍の後押しのある時代であったと感ずる。

小学校は昭和の始めに現在地に移転をした。これらの碑も現在の「忠魂碑」のあるところに

移転した。その後昭和七年、戦争記念碑一基と「忠魂碑」が建てられた。景観は「忠魂碑」を囲むように後ろに戦争記念碑四基があったことが残っている礎石跡から見えてくる。奉安殿と共に重要な施設であったと想像できる。

昭和二十年に終戦となり、軍事色が一扫される時代となった。篠原小学校昭和二十二年七月二十六日の記録に「忠魂碑除去作業」とある。全ての碑が撤去され西神明神社に運ばれたとのことである。荷車で運んだという人は、「こんなものがそのまま建っていたら大変なことになると思った」と言っていたそうだ。

昭和二十七年講和条約の発効から忠魂碑等の再建の気運が全国的に起こり、昭和二十九年に忠魂碑が再建され、四基の戦争記念碑は昭和三十三年に元在郷軍人会や石碑刻名者代表により、八阪神社に再建された。「日露戦役記念」碑の裏面に埋め込まれた金属プレートには、再建世話人七人の名前が刻まれている。

時代の変化と共に場所を変えてきた四基の戦争記念碑、現在の場所が最も長く五十六年にもなる。ごちらかと云つと負の遺産のイメージがあり、記念物としてスポットが当たることはなかった。

歴史メモ13

むかし話

会員 鈴木幹久

火の玉

いつ頃だろう「火の玉」を見なくなったのは。「火の玉」の話を聞かなくなったのは。私が子供の頃は、夕食後の一家団らんで、就寝時の布団の中で、「ねえおじいちゃん、話して」とせがんだものでした。「家の人が亡くなると、火の玉がフワフワとその家から出て行くんだよ」とか「わしが若い頃、用があつて浜に行つた。帰りは薄暗くなつていた。ふと松林の向こうを見ると、何か明るいものが、フワフワとこちらに向かって来た。近くに來ると火

松露はつばい村の名物だった？

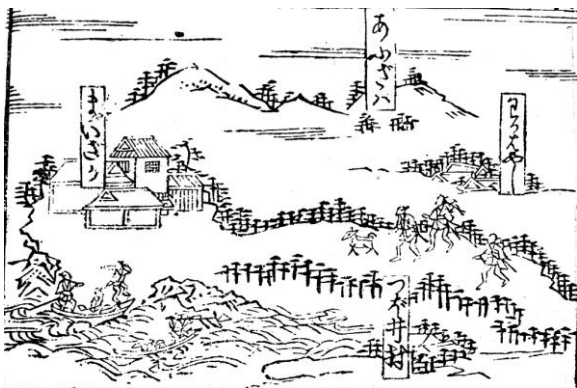
江戸時代の浮世草子作者、俳諧師としても有名な井原西鶴の、現在で言えようか旅行案内図のような『一目玉鉾』に、この地域のことが載っている。以下はその該当部分を抜粋したものである。

○ 漬まつ

～ひだりかたはかぎりなく大海波あらし爰を遠江灘といふ也、是より松原の砂道つゞきて物淋しき所なり若林の郷赤塚篠はら新田すぎて右のかたに入海はるかに山きわに大沢などいえる所あり、左のかたに蓮の咲ける長沼有壺井村といへる所有、松はやし中に里有、春秋は松露をほりて童子賣ける名物也かし、馬のたくさんなる海道なり”

この『一目玉鉾』は、元禄二年（1689）作で、巻一から巻四まであり、北は蝦夷干島から、南は長崎県對馬までと、歩き書き残したものである。

松露：春海浜の松林の砂中に育つキノコ的一种



出典：『定本井原西鶴 第九巻 絵入一目玉鉾 三』

の玉だった。わしは持っていた担い棒を構えた。「それでどうしたの」。「火の玉はわしの少し前で向きを変え、どこかへ行ってしまった。わしは足がガタガタふるえ、とんで家に戻った」そんな話を聞くと、怖くて布団の中にもぐりこんだものでした。最近「火の玉」の話を聞かなくなりました。どこへ行ったのでしょうか。

きつね山

昔話をもう一つ。篠原町太田の線路北に、昔こじんまりした小山と森がありました。この小山を、地元では「きつね山」とか「いもり塚」とか呼んでいました。そこにはこんな

昔話があります。

「きつね山には狸が住み着いていて、時々人を化かしに出たそう。近くを通る汽車にも悪さをした。狸は若い娘に化け、着物姿で線路を歩いてた。汽車の運転手は、びっくりして急ブレーキをかけた。ところが回りを見ても何も無い。『またやられた！』よく騙されたもんだ。そのたんび汽車が止まった。あるとき、狸はちよつと気を緩めて線路上で寝てしまった。『オー』狸が気が付いたとき汽車は目の前に。慌てて逃げたが大事な大事な夕〇タ〇を轢かれてしまった。それで、急いで柳本先生とこ行って診てもらったそう。

それ以来、狸は悪さをせんようになつたといふことじゃ

この昔話では、きつね山に住んでいたのは、何故か狸になっています。柳本先生というのは柳本満之助先生。医者だけでなく、歌人、柳本城西としても知られています。余談ですが近くの篠原小学校に歌碑があります。「吾が甥と一緒の志願兵なりきソロモンの海に潜きて還らず」何かの機会に訪ねて下さい。

浜風会会報第23号
 篠原協働センター同好会「浜風会」
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
 編集委員 委員長 山下勝彦
 鈴木清 鈴木義雄 鈴木幹久
 鈴木忠 中山清
 発行責任者 山下勝彦
 発行平成25年7月1日
 連絡先：浜松市篠原協働センター